

a 学校教育目標	学びに向かい、心豊かで、健やかな児童の育成 ～「かしこく」「やさしく」「たくましく」～		b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】(自校の使命) 自分を愛し、夢語る児童の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 「通ってよかった」「通わせてよかった」と誇りに思われる学校											
	評価計画				自己評価				改善策		学校関係者評価				
	e 中期経営目標	d 短期経営目標		e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	10月 h 達成率	2月 h 達成率	i 達成率	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善策	l 評価		
												イ	ロ	ハ	
確かな学力	確かな学力の育成(かしこく)	授業力の向上	○小泉小学習モデル「課題設定」「個人思考」「集団思考」「まとめ」「振り返り」に沿った授業の実施と充実 ○既得の知識を事象に関連付けられる力の育成と「話し型」「振り返り」の効果的な活用 ○ICTを活用した授業改善 ○定期アンケート評価による成果と課題の把握、分析、改善策検討	教師評価により、以下のことを見取る。 ○「話し型」の活用による具体物、半具体物を用いて説明する(表現する)児童の割合 ○「わかったこと」「が(がんばったこと)」と「友だちの考えから学んだこと」 ○「も(もっと知りたいこと)」に沿って、自らの学びを調整しようとする児童の割合 ○外国語科のやり取りにおいて、簡単な語句や表現を用いて、3往復程度の会話を継続できる児童の割合 ○算数科、外国語科においてICTを活用した授業を各学期1回以上仕組む教員の割合	7月80% 12月85% 2月90%	81%	85.2%	95.0%	B	○「話し型」を活用して考えを説明する児童の割合は中間評価の74%から82%となった。これは、ノートに考えを書かせたり、小集団で話し型を使って説明させたことなどの支援が有効であったと考えられる。一方、18%の児童に課題が見られる。 ○ふりかえりの視点に沿って、自らの学びを調整している児童は88%だった。一方で、振り返りは書けても、「学びの調整」の具体的なイメージがもてない児童がいるという課題が見られた。 ○外国語科において3往復程度の会話を継続できる児童は71%だった。「反応words」を掲示したり、「small talk」の場面で、既習表現を反復練習させたことにより、会話を継続させられる児童が増えた。 ○算数科、外国語科において、どの学年でもICTを活用した授業を実施することができた。ICTの活用研修で、具体的な活用方法を学んだだけでなく、ICT担当を中心に、日常的に教員同士で有効な活用方法について、相談できる風土が醸成できたことが有効だったと考える。	○「話し型」を使うことの目的と意義、具体的な指導の仕方を職員研修で周知し、全クラスで共通して指導することの徹底を図る。また、研究授業を中心に、児童が「話し型」を用いて説明することができているかについても職員同士で評価し、改善につなぐ。 ○今後も、視点にそった振り返りを継続するとともに、特に「と(友だちの考えから学んだこと)」や「も(もっと知りたいこと)」を、児童が書きたくなる授業づくりをする。 ○3往復程度の会話を成立させるために、「small talk」の場面で既習表現を繰り返し活用させることを継続する。また、実際のやりとりの途中で、中間評価を取り入れ、児童が安心して会話を継続できるよう支援する。 ○ICTの有効な活用については、今後も研修を、職員同士で気軽に相談できるようにする。	5	0	0	・「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」「信頼される学校」の全領域において、「児童や学校、地域の実態を適切に把握し編成した教育課程に基づき組織的かつ計画的に学校の教育活動(授業)の質の向上を図っておられると思う。今後とも引き続き取り組まれることを期待する。 ・広島県の15歳の生徒に付けさせたい力として示されている「自己を認識し、自分の人生を選択し、表現することができる力」を意識され、日々の取組を進めていただければと思う。その観点からも、「話し型」を活用して考えを説明する力を伸ばそうとする取組は適したものであり、その成果に期待する。 ・各学力調査等において数値も伸びてきているよう、全教職員で学力向上の取組が進められ、成果が出てきていることが分かる。すばらしい。 ・目標を評価するためのアンケート等を情報提供してほしい。 ・目標値に達していない児童への取組が充実することを期待する。 ・今後も、子供たち一人一人のエンパワメントを見つけていただき、自分で立ち上がる、考えることのできる教育をお願いしたい。
		基礎学力の定着	○学力向上週間の計画的、効果的実施 ○計画的、効果的なドリルタイムの実施 ○家庭学習の質的向上とやり切らせる指導 ○学力調査の結果と課題分析を、全教職員で実施、個に対応した手立てと授業改善策の検討 ○学力調査40ポイント以下の児童への手立ての充実	○単元末テスト「思考・判断・表現」のポイント ○学力調査において、全学年が算数科において市平均以上、国語科、理科において全国平均を上回る。 ○学力向上朝会において、40ポイント以下の児童に対して複数体制での指導を実施した割合	85%以上	80%	80.0%	94.1%	B	○単元末テスト「思考力・判断力・表現力」については、中間評価と比べ国語科において5、2ポイント、理科において2、3ポイント上昇しており、全学年平均で85%以上を達成した。算数科においては、2、3ポイント低下しており、85%に達していない学年が4学年あったことから、算数科の思考力の向上が課題である。 ○標準学力検査(NRT)において算数科市平均以上の学年(2/5)、国語科・理科全国平均以上の学年(国語科3/5、理科3/3)であった。 ○全国学力・学習状況調査において、国語科70(広島県66、全国64、7)、算数科71(広島県70、全国70、2)であった。	○算数科における「思考力・判断力・表現力」の向上を図るため、授業の中で、児童が考えたいような問いの工夫をしていく。一問一答のような授業にするのではなく、児童が問題を自分自身の生活とつなげて考えることができるような問いを設定していく。 ○今年度の学力調査の結果から明らかになった課題の克服を目指し、ドリルタイムにNRT対策のアシストシートや、各学年で作成したNRT類似問題を使った対策を継続していく。また、来年度の学力調査に向けて作成した類似テストを実施し、結果の検証を行う。	5	0	0	
豊かな心	豊かな心の育成(優しく)	ふるさとを愛する心身の育成	○一校一貢献をゴールとした生活科、総合的な学習の時間を中心とした「地域貢献活動」の効果的実施 ○学期毎に取組内容の効果的検証、改善策検討	○学校アンケート「小泉の地域が好きですか」の肯定的評価4の児童の割合	85%	92.3%	96.0%	113%	A	○学校アンケート「小泉の地域が好きですか」の肯定的評価の児童の割合は、各学年で工夫しながら地域とのつながりに焦点化した単元を生活科・総合的な学習の時間で進めている成果だと考える。しかし、アンケート回答「4とも」を選んだ児童が前年から28減っており、小泉町の持つ魅力を実感できるような学習に取り組んでいく必要がある。	・各学年の担任を中心に生活科、総合的な学習の時間の単元計画の見直し・改善を行い、小泉の人・もの・ことよさを実感できるように、児童の「ふるさとを愛する心」の醸成を図る。	5	0	0	・「小泉小5つの宝」は児童の道徳性、規範意識の醸成につながるものだと思う。児童一人一人が学年段階に応じたこの意味を理解することを期待する。 ・コロナ禍であっても、工夫して取り組まれており、すばらしい。 ・今後とも、地域とのつながりをお願いしたい。 ・地域貢献活動の具体的な内容の説明が欲しい。
		「小泉小5つの宝」の継承	○「小泉小5つの宝」(①ほかほか言葉②だまっで掃除③美しい靴揃え④気持ちのよいあいさつ⑤静かな廊下歩行)の共通理解と日々の取組実施 ○ハイパーQUIや定期アンケートの評価による成果と課題把握、分析、改善策検討	○「小泉小5つの宝」のうち生徒指導部の設定した重点項目を用いた重点強化週間振り返りにおける児童の肯定的評価 ○ハイパーQUI(6月中旬、1月下旬)分析による学級生活満足群の割合で評価	85%	94.0%	94.5%	111%	A	○「小泉小5つの宝」については、多くの児童が意識して取り組み、その良さを感じるとともに、実践しようとする意欲の向上が見られた。今年度は、「ほかほか言葉」と「気持ちのよいあいさつ」を重点項目とし、それぞれ強化週間を行った。児童の肯定的評価の割合は「ほかほか言葉」が93%、「気持ちのよいあいさつ」が96%であった。 ○ハイパーQUIにおいて学級生活満足群の割合は、70.4%であった。取組として、各学年で児童主体のお楽しみ会を企画させたり、係活動や委員会活動で児童が主体となって活動できるように仕組んだ。また、校内研修で結果の分析や改善策について交流する機会を持つことで、学校全体でできる指導が広がるよう取り組んだ結果、学級生活満足群の割合が上昇した。しかし、30%の児童がその他の分類に入っており、個に対する支援や手立てが引き続き必要である。	・「小泉小5つの宝」では、多くの児童が意欲的に取り組み、ほぼ定着することができた。来年度に向け、さらに意欲や達成感を持たせるために、5つの宝の中身のレベルを上げることや、別の目標を付け足すことを検討している。今年度発足した代表委員会が来年度2年目になる。児童会役員を中心に5つの宝を守るだけでなく、児童が主体となってよりよい学校を作っていくよう指導する。また、児童の頑張りを適切に見取って評価していけるように評価の方法やタイミングについて改善していく。 ・学級生活満足群に属さなかった児童の課題を明らかにし、切れ目のない支援を行うよう、学校全体で、課題の共有を図るとともに、次年度に向けて、児童が安心して過ごせる環境づくりに継続して取り組む。	5	0	0	
健やかな体	健やかな体の育成(たくましく)	運動能力の向上	○体力テストの結果分析による課題(平成31年度課題50m走、シャトルラン)を克服することを目的とした、体育(がんばり)朝会、体育科の授業等での取組実施 ①走り方の指導(指導用の動画を活用) ②毎時間の体育科の授業冒頭におけるダッシュ実施 ③体育(がんばり)朝会での3分間走実施 ○運動会、3分間走等において児童が自己目標を決定(がんばりカードの活用)、目標達成に向けた取組実施	○重点項目「50m走」「シャトルラン」において、平成31年度の国・県平均以上の学年	90%以上	50m走 58.3% シャトルラン 8.3%	50m走 75% シャトルラン 16.6%	50m走 83.3% シャトルラン 18.4%	50m走 B シャトルラン D	「50m走」において、平成31年度の国・県平均以上の結果となった学年は、75%(9/12)。「20mシャトルラン」では、平成31年度の国・県平均以上の結果となった学年は、16.6%(2/12)で、3年生女子と4年生女子のみであった。体育朝会のサーキットトレーニングで児童の基礎体力の向上、3分間走で持久力の向上に向けて取り組んだが、目標達成には至らなかった。しかし、「20mシャトルラン」においては、6月に比べて記録が伸びた学年が、全体の83.3%(10/12)であり、取組の一定の効果が見られた。コロナ禍で、児童の運動機会の減少が一因として考えられるが、取組を継続することにより、一定の成果が見られたため、引き続き継続した取組が必要だと考えられる。	・感染症対策を考慮した上で、体育朝会を工夫しながら継続して実施し、児童の運動機会を確保していく。 ・「運動することが楽しい」と感じ、日常的に運動に親しむ児童の増加につながるような取組を進めていく。	5	0	0	・新型コロナウイルス感染症防止の取組の中で、よく取り組まれていると思う。今後も、どんな取組が可能か検討していただければと思う。 ・今年度もコロナ禍が続き、感染症対策で業務も増え心労も多かったと思う。児童も体力面で心配だが、よい効果が表れている。今後も継続して取り組んでほしい。 ・運動をすることの楽しさやみつめていく工程が大事であるのでお願いしたい。
		体をつくる	○栄養職員、養護教諭による、食べ物や、食事を作ったことなどへの、感謝の気持ちをもたせる取組実施 ○各学年において、給食を食べ切る分量の自己決定と完食しようと努力する児童の育成	○栄養職員、養護教諭による栄養指導を各学年1回以上行う。 ○学校アンケート「給食は自分で決めた分量を食べていますか」の肯定的評価	100%	66.7%	100%	100%	A	・栄養士を招聘して、全学年で「給食について知ろう」「苦手な野菜について考えよう」「6つの基礎食品群を知ろう」等のテーマで食育指導を実施することが出来た。指導後の成果として食べ物や命や作ってくださる方への「感謝」の気持ちについて振り返る児童が多く、残さず食べよう、苦手なものを食べるために工夫しようという意識が高まった。 ・「自分で決めた量を食べる」取組については、食育を空にする取組(1学期)から個人の完食、3学期は個人の完食+低学年はクラスの完食の取組を行った。その結果「食べきる量」を自分で決めることが出来た」と回答した児童は84%。「自分で決めた量を5日間食べきった」と回答した児童は83%(2学期)から90%(3学期)へ増えた。	・栄養指導は、いつも食べている給食を、より身近に感じる事が出来、感謝の気持ちや残さず食べようとする意識を高めるために有効だったため、来年度も計画的に実施していく。 ・自分で決めた量を食べることが出来る児童の多くは、好き嫌いによることが多い実態がある。少しでも食べることが出来る様に、懇談で家庭との連携を図ったり、保健だより等で啓発したりする。	5	0	0	・一人ひとりの児童の健康状態を配慮し、給食を楽しみ食べられるように取組をされ、完食ができる効果もあり、良いと思う。 ・自分で決めることを学べるよい機会だと思う。 ・児童が自己決定した量を完食することが出来たと思う。しかし給食指導＝完食指導になってほしくないと思う。 ・保護者との連携も継続してください。
信頼される学校	信頼される学校づくり(つながる)	活用する	○開発した地域の教材、施設の効果的活用 ①生活科、総合的な学習の時間における地域教材の発掘、施設との交流 ②ゲストティーチャーの招聘と活用	○地域、施設、人材の活用効果的検証と新たな教育活動の再構築	各学年学期1回以上	交流1学期 3/6 2学期 5/6 (計画含む)	交流2学期 12/6 3学期 6/6 (計画含む)	100%	再構築A	・コロナ禍のため、直接地域の方と触れ合う機会が設定できなかったが、できることを工夫し、柔軟にカリキュラムを創造することができた。 【例】 ・地域の施設を尋ね、職員の方(1名)に外でインタビューをした。 ・リモートで施設の方との交流をおこなった。 ・屋外での農作業体験を行った。 ・特別支援学校の生徒さんとの直接交流を、感染が落ち着いた時期に変更して実施した。など	・感染症対応のため、できないことも多いが、地域と連携を図り、職員の柔軟な発想をカリキュラムの改善に生かして、「地域のよさに気づき、地域を愛する児童の育成」につながるよう取組を進めていく。	5	0	0	
		発信する	○学校便りの定期的な発行とPTAを活用した地域への配付 ○学年便りや学年の教育活動の様子をHPアップ ○一校一貢献の取組の学期1回以上のHPアップ	○保護者アンケートにおける「学校は保護者の願いに応えた教育を行っていると思えますか」の肯定的評価	90%以上	95.1%	98.1%	109.0%	A	・コロナ禍で、行事を通して児童の成長した姿を保護者に見ていただく機会は限られている。しかし、学年別参観日発表会やホームページ等を活用して、児童の様子を発信する努力をしている。また、日頃、連絡帳や電話を通して、きめ細かい保護者連携を行うことができている。	・今後も「児童の成長」を教育の中心に据え、保護者、学校、地域、関係機関と連携を図りながら、チームとして子どもたちを育てていよう努力する。	5	0	0	・毎月学校便りを読ませてもらっている。小泉小学校の取組の様子がよく分かる。
		組織の活性化と効果的な教育活動推進	○学校経営会議を核とし、ベクトルを揃えた取組実施 ○各部会(研究推進部、生徒指導部、保健体育部)による進捗管理とPDCAサイクルによる改善策の検討実施 ○学校経営会議、準備生委員会を活用した「働き方改革」の更なる推進(45時間以内、持ち帰り)	○「効率的な働き方ができている」「児童と向き合う時間が確保できている」教職員の肯定的評価	100%	100.0%	100.0%	100.0%	A	・「効率的な働き方ができている」「児童と向き合う時間確保ができています」とも、100%の職員が「できている」と回答している。 ・「手を中心に、それぞれの分掌で新たなアイデアを出し、主体的に取組を進めることができた。働く時間の削減とともに、質の向上が見られると感じる。	・来年度に向けて、校務分掌を見直し、必要な業務に重点化していく。小規模校の良さをいかし、全ての職員が学校運営に参画しているという意識をさらに育てていく。 ・職員の努力している姿を適切に評価することにより職員の「働きがい」や「自己有用感」を高めていく。	5	0	0	・働き方改革が取り組まれ、進展していることがよく分かる。学校経営のすばらしさの現れである。 ・学校教育にとって、一に先生方が健康であることが大切である。今後とも超過勤務が減少するよう取組を推進していただき、先生方に教師力向上のための自己啓発の時間が取れることを期待している。 ・職員が心にゆとりをもって学校教育に取り組めるよう願っています。 ・小規模校の長所を生かした、家庭的な取組をこれからもお願いしたい。

【:自己評価 評価】  
A:100%以上(目標達成)  
C:60%以上(もう少し) < 80

【:学校関係者評価 評価】  
イ:自己評価は適正である。ロ:自己評価は適正でない、ハ:分からない。